京都大学	博士(文学)	氏名	申　　英　姫
論文題目	A PHONOLOGICAL STUDY OF YANBIAN KOREAN (延辺朝鮮語の音韻的研究)		

(論文内容の要旨)

本研究の目的は、現地調査によって収集したデータに基づき、中国吉林省延辺朝鮮族自治州で使用されている延辺朝鮮語の音韻の諸特徴を明らかにすることである。

第一章では中国朝鮮語の形成及びその分布について概観する。朝鮮語は韓国および北朝鮮の公用語である。朝鮮半島は中国と地続きになっており、両国の間では昔から頻繁な交流が行われてきた。朝鮮半島より多くの人々が中国東北部に移住したため、そこでは現在多くの朝鮮族が朝鮮語を使用している。中国では朝鮮族は少数民族の一つとみなされており、凡そ200万人が居住している。現在中国に居住している朝鮮族は主に清代以降に朝鮮半島から移住してきた人々に由来している。清代以降の移民は三段階に分けることが出来る。第一段階は19世紀中葉から1910年までであり、この時期の移民は主に自然災難から逃れた難民である。第二段階は1910年の「韓日合併」から1931年の「9.18事変」寸前までであり、移民は主に破産した農民と反日志士である。第三段階は1931年の9.18事変から1945年の終戦までであり、この時期の移民は開拓民が主となる。

移住の際には集団で移住したため、結果として中国国内に多くの朝鮮語の「言語島」を形成することとなった。近年では中国朝鮮語は中国朝鮮族の移住によって使用地域が拡大し、また単純な分布から比較的複雑な分布へと変わってきている。本研究が対象とする吉林省延辺朝鮮族自治州で使用されている朝鮮語は中国国内では最大の話者を擁する。延辺地域は主に朝鮮半島の咸鏡北道の出身者により開拓され、現在住民の多くは咸鏡北道出身者の2-4代目である。

第二章では延辺朝鮮語の音韻体系を述べたうえで、延辺朝鮮語の語彙の来源や歴史変化について纏める。先行研究によると延辺地域で使用されている朝鮮語には朝鮮半島の六鎮方言と咸鏡方言に由来する二つの方言が存在するという。これら二種類の方言の違いは子音の口蓋化の有無、母音の添加の有無、中期朝鮮語の語頭n-の保存によって分類されている。筆者の収集したデータでは現在の延辺朝鮮語においてはこれらの二種類の方言の区別は失われつつあることが明らかになる。また、咸鏡道においてのみ使用される語彙の多くが引き継がれていることを指摘する。形態音韻論的側面としては、母音調和およびウムラウトについて取り上げる。延辺朝鮮語では、朝鮮半島で使用されている言語では殆ど消失している母音調和がある程度保持されていること、また朝鮮半島の言語では見ることができないウムラウトが観察できることを論じる。更に、通時的な観点から延辺朝鮮語の音韻について考察を加え、現代の諸方言の一部

では失われてしまった古い音韻上の特徴がなお保持されていることを明らかにする。

第三章では中期朝鮮語における声調と現代諸方言や延辺朝鮮語に保存されているピッチアクセントとの関係について述べる。現在ソウル方言では基本的に母音の長短が弁別機能を持っており、日本語の高低アクセント、英語の強弱アクセントのように、アクセントの違いによって単語の意味を区別することはないと言われている。その一方で、延辺朝鮮語は高低アクセントを保持し、アクセントによって単語の意味が区別される。このピッチアクセントは中期朝鮮語における声調に由来すると考えられている。中期朝鮮語の資料では、平声、上声、去声、入声の四つの声調が区別されており、これらは朝鮮文字に傍点を加えることによって記録されている。これらの声調は少なくとも15世紀末までは完全に存在していたが、16世紀後半になって多くの方言で消失し、中期朝鮮語と近代朝鮮語とを区別する要素の一つだと考えられている。中期朝鮮語における声調がどのような音声的な特徴を持っていたのかに関しては、大きく母音の長さを反映しているという説とピッチアクセントを表わしているという二つの異なった説がある。本章では中期朝鮮語文献における声調に関する記述や先行研究での声調の解釈について再検討を行った結果、中期朝鮮語の声調はピッチアクセントと対応関係があることを示す。

次に、収集したデータを基に、延辺朝鮮語の固有語におけるピッチアクセントの分布について考察を加える。延辺朝鮮語の固有語におけるアクセントパターンには以下のものが認められる（括弧内は主格語尾のピッチアクセントである）。

一音節：H(L)　L(H)
二音節：HL(L)　LH(L)　LL(H)
三音節：HLL(L)　LHL(L)　LLH(L)　LLL(H)
四音節：HLLL(L)　LHLL(L)　LLHL(L)　LLLH(L)　LLLL(H)

統計分析によりアクセント核のないパターンを除き、ピッチアクセントの分布は音節構造と関係していないことが分かる。また、所格や与格がつく際にピッチアクセントが語幹から所格や与格に移動することを例証する。

第四章では延辺朝鮮語と現代中国語との言語接触について考察を行う。延辺朝鮮語は現代中国語との接触により音韻、語彙、文型の面で朝鮮半島の各方言と異なる様相を表している。話者の大部分は二重言語環境で生活しており、日常的にコードスイッチングとコードミキシングという現象がしばしば起こる。特に注目すべき特徴として、現代中国語からの多数の借用語（現代中国語借用語）を挙げることができる。現代中国語借用語は、現代中国語が延辺朝鮮語の音韻体系に適応した語であり、理論的には全ての中国語の語彙を現代中国語借用語として発音することができる。これらは、歴史上のある段階で中国語が漢字という文字を媒介として朝鮮語に取り入れられ、朝鮮

語特有の字音として読まれた所謂朝鮮漢字音とは異なり、現代中国語の語彙が延辺朝鮮語の音韻体系に適応した語である。中国語語句を中国語の発音そのまま使用することもあるが、多くの場合は延辺朝鮮語の音韻体系に合わせて原語の音を変容させる。

現代中国語借用語のアクセントにおいてもそのような変容を見ることが出来る。これに関しては、幾つかの先行研究はある。分析方法に関しては若干の違いが見られるものの、何れも延辺朝鮮語における現代中国語借用語のアクセントは現代中国語の声調と関係があると主張している。筆者の分析結果は以下のように纏めることができる。疑問符がついているのは判断が揺れている部分であり、先行研究とも異なる点でもある。

末音節 / 次末音節	第一声	第二声	第三声	第四声	軽声
第一声	(11)？	(12) HL	(13) HL	(14) LH	(10) HL
第二声	(21) LH	(22) HL	(23) HL	(24) LH	(20) HL
第三声	(31) LH	(32) LH	(33) HL	(34) LH	(30) LH
第四声	(41)？	(42) HL	(43) HL	(44)？	(40) HL

同じ声調が続いているパターン、疑問符を施したパターン、(14)パターンを除き、全てのパターンは現代中国語の声調の調値により説明できる。声調の調値を1＝4＞2＞0＞3というランキングに設定すると、現代中国語借用語のピッチアクセントは現代中国語の声調の組み合わせの中で、末音節の調値と次末音節の調値を比べることによって明らかになる。即ち、末音節が次末音節より高い際にはLHとして出現し、末音節が次末音節より低い際にはHLとして出現する。同じ声調が続いているパターンに関しては、延辺朝鮮語ではひとつの音節にしかピッチアクセントが落ちないために、HHが現れることはない。疑問符を施したパターンについては、先行研究では大体LHとして出現していると述べているが、本研究ではHL、LH、そしてHLとLHの自由変異という三つのパターンが存在する。筆者はこれには社会言語学的なパラメーターとしての単語の定着度が関与していると考える。統計分析の結果、日常生活で良く使用される語ほどLHとして出現し、そうではない語に関しては、HL、もしくはHLとLHの自由変異として出現する。(14)パターンに関してははまだ妥当な説明がつかない。また、現代中国語借用語にも固有語と同様に、所格が付く際にはピッチアクセント移動が見られる。

また、現代中国語借用語を延辺朝鮮語の音韻体系に適応させる際に、無視することができないのは子音の振る舞いである。現代中国語借用語と外来語の子音が延辺朝鮮語の平音、激音と濃音にどのように対応するのか明らかにする。現代中国語の有気音は現代中国語借用語の激音と一対一で対応するが、現代中国語の無声閉鎖音および歯

擦音と、現代中国語借用語の濃音および平音との対応は複雑であるが、収集した約900の現代中国語借用語のデータをもとに分析した結果、以下の知見が得られた。1．中国語の有気音は現代中国語借用語の激音と対応する。2．中国語の無気閉鎖音は現代中国語借用語において語頭に来る時は主に濃音で、語中に来る時には濃音、或いは平音で現れる。3．中国語の歯擦音は現代中国語借用語において語頭・語中に関係なく主に濃音で現れる。さらに、単に子音を比較するだけでは平音と濃音の出現を完全には予測できないため、筆者は平音・濃音の分布には声調や後続する母音が影響していると考え、語頭と語中で平音が現れる環境について統計分析を行う。その結果、声調、鼻音韻尾、主母音の音色、さらにそれらの語が日常生活にどの程度定着しているかが、平音・濃音の出現に影響を与えていることを明らかにする。

第五章では中国語以外の言語から導入された借用語を対象としてその音韻分析を行う。延辺朝鮮語には英語や日本語を起源とする語が多く存在しており、借用された時期や導入経路によって原語と異なった音韻対応を示す。筆者が収集したおよそ500語の借用語は、導入経路によって大きく二種類に分けることができる。直接借用された語と他の言語（方言）を経由して借用された語である。前者には日本語とロシア語から直接借用された語が含まれており、後者には日本語、韓国語、中国語を通して借用されたものが含まれている。日本語からの借用語は特に20世紀の前半に、韓国経由の借用語は中国と韓国との外交が正常化した1992年以降に借用されたと考えられる。直接借用された語は原語の音を忠実に反映されているが、他の言語を経由して借用された語には原語の音韻的特徴はかなり失われている。この違いにより借用先の原語を特定することができる。しかし、外来語借用語の形だけで導入経路を確認できない語も存在する。

借用語のアクセントのパターンは固有語とは異なり、Hピッチを持たない語は存在せず、どの語も必ず一つの音節にHピッチを持つ。また、固有語では末音節にアクセントがあるものが最も多いが、借用語に関しては数の上では次末音節の位置にアクセントが存在する語のほうが多い。また、固有語ではアクセント核のない語を除いて、アクセントの位置は音節構造と無関係であるが、外来語に関してはアクセント位置が音節構造とも関係していることが明らかになる。また、その語が日常生活に定着しているかどうかという社会言語学的なパラメーターもアクセントの位置に関与しており、日常生活に定着している語では音節構造に関係なく末音節の位置にアクセントが落ちる傾向が明らかになる。

第六章は本研究についての総括であり、本研究により明らかになった点が纏められている。

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、中国吉林省延辺朝鮮族自治州で話されている延辺朝鮮語の音韻特徴の解明を目指した研究である。延辺地域は主に朝鮮半島の咸鏡北道の出身者により開拓され、現在の住民の多くは咸鏡北道出身者の２代目から４代目にあたる。論者は、現地調査において３人の母語話者から収集したデータを綿密に分析することによって、意義ある成果を提出している。

中国内部の朝鮮語の形成とその分布について概観した第一章に続いて、第二章では延辺朝鮮語の共時的な音韻体系を示したうえで、それを他の地域で話されている朝鮮語、さらに中期朝鮮語の音韻体系との比較を行う。その結果、現代の他の地域の朝鮮語の多くでは失われてしまった古い音韻特徴の一部が、延辺朝鮮語ではなお保持されていることを明らかにする。

第三章では中期朝鮮語における声調の歴史的変化について考察がなされている。現代ソウル方言などでは母音の長短のあいだに対立がみられ、日本語の高低アクセントのようにピッチの違いが語の意味を区別することはないと言われている。これに対して延辺朝鮮語ではピッチアクセントが弁別的機能を持っており、中期朝鮮語資料のなかで声調によって表記されていたプロソディの特徴が部分的に保持されていると主張する。

第二章と第三章が主に延辺朝鮮語の歴史的位置づけについて述べられているのに対して、第四章では中国語との接触によって延辺朝鮮語が取り入れた多数の借用語の分析を行っている。もとより中国に移住した朝鮮語母語話者は、中国語からの圧倒的な影響を受けた結果、大量の中国語起源の語彙を取り入れている。これらの借用語は、漢字を朝鮮語特有の字音で読んだ所謂朝鮮漢字音とは根本的に異なり、中国語の語彙の発音を延辺朝鮮語の音韻体系に適応させた結果、成立した語彙である。この第四章は借用の際に生じた音韻の適応の実態とその過程を新たな視点からきわめて実証的に分析・論証しており、本論文全体のなかでもっとも注目に値する内容となっている。

第四章では、二つの重要な成果が提出されている。ひとつはアクセントパターンの適応についてである。中国語から延辺朝鮮語に入った借用語は二音節語が多いが、末音節あるいは次末音節のいずれかのピッチが高くなる。どちらの音節のピッチが高くなるかについて、原語である中国語の声調との関係を以下のように考えることによって、先行研究で説明しきれない部分を論者は明らかにする。すなわち、声調の調値に関して、高く始まる一声と四声が最も高く、次いで二声、三声の順に低くなると考えれば、末音節が次末音節より高い場合には、適応の結果延辺朝鮮語ではLHとして出現し、末音節が次末音節より低い場合にはHLとして出現することになる。中国語で同じ声調が続く場合に関しては、延辺朝鮮語ではひとつの音節にしかピッチアクセントが落ちないために、HHが現れることはない。この場合、HLあるいはLHが出現するが、どちらで現れるかについては社会言語学的なパラメーターとしての単語の定着

度が関与していると論者は考える。つまり、日常生活で馴染みのある語ほど、延辺朝鮮語の固有語と同様に解釈され、LH で現われるとする。

第四章のもうひとつの重要な成果は、借用の際にみられる阻害音の適応に関するものである。すなわち、中国語の有気音と無気音が延辺朝鮮語の平音、激音、濃音とどのように対応するかという問題である。延辺朝鮮語の激音は有気音のことであるから、中国語の有気音が激音で取り入れられることはまったく自然である。問題は無気音と平音、濃音の対応である。これについて論者は、平音と濃音が現れる環境について統計的分析を行った結果、声調、さらに鼻音韻尾、主母音の音色、日常生活における定着度が、平音・濃音の分布に影響を与えていることを明らかにする。

第五章は、中国語以外の言語から延辺朝鮮語に入った借用語を対象にした分析である。これらの借用語のアクセントパターンは、末音節にアクセントを持つ固有語とは異なり、次末音節の位置にアクセントを持つ語のほうが多い。また、固有語の場合と異なり、これらの借用語に関してはアクセント位置が音節構造の違いにも関係していることを明らかにする。

以上述べてきたように、本論文は特定の言語を対象にした音韻研究にとどまらず、歴史言語学や社会言語学の分野にも波及する内容を備えた研究成果である。またその成果のなかには言語学一般への寄与となる知見も含まれている。たとえば、声帯の緊張の度合いによって、子音の強さとピッチの高低が相関することはよく知られている。言語変化において子音がピッチに影響を与える事例は数多く、東南アジアの諸言語にみられる声調発生という現象などがあげられる。本論文で示された中国語の声調の違いが延辺朝鮮語の借用語にみられる平音・濃音の分布を決定するという主張は、逆にピッチのほうが子音に影響を与えるという事例のひとつと考えられる。

もちろん本論文にも望まれる点がないわけではない。およそ二百頁からなるこの英文論文には豊富なデータや多くの図表が含まれているが、それらすべてに対して明示的な説明が施されているわけではないため、ときおりみられる不適切な英語表現とあわせて、読む側に相当の負担が求められる。しかし、こうした点は本論文の価値を大きく損なうものではなく、今後の研鑽によって改善できると思われる。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお2011年8月12日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。